2023.09.13

ASD の論文を読む

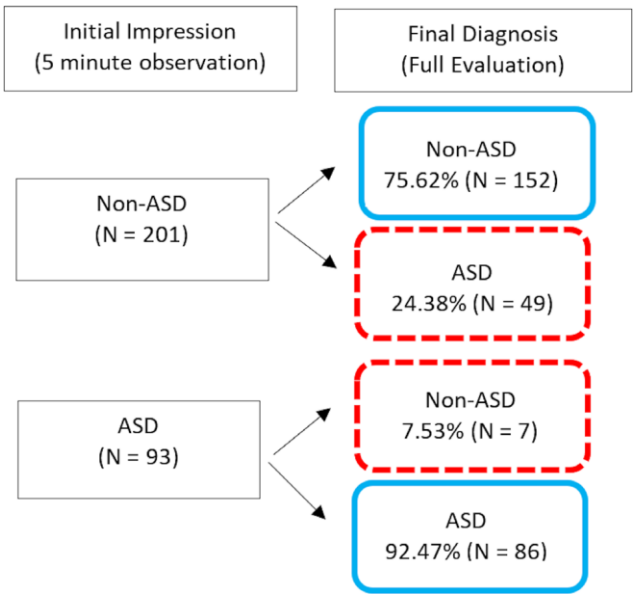
小嶋祥三

この HP で ASD の論文を読んでいる。最後に勤務していた慶應義塾の心理の同僚が ASD の研究をやっていたので、その援護射撃のつもりで勝手に読んでいる。ASD の早期発見、早期介入の論文を紹介するのが主眼なのだが、定型発達児 TD の研究も含め、結構幅広い年齢、領域の論文を読んでいる。

わたしはこれまで、ASD と直接かかわる研究を殆どしてこなかったし、これからもしないだろう。したがって、論文をあまり深く読み込んではいない。こういう論文がありましたよ、と図表を多く載せて、方法の重要な点と主要な結果を紹介している。論文に興味を持った人は、直接その論文に当たるだろう。そういうきっかけになればいいと思っている。

ごく最近、ASD の case report を読んだ。後に ASD と診断される一人の幼児の診断前の行動が、一人の TD の幼児との比較で、報告されていた。ASD となる幼児の行動は、TD の行動と異なっていた。ただ、ASD の症状は多様なので、case report が ASD 研究にどれほどの影響を持つのか、疑問に思った。

この case report は以前に紹介した論文を思い出させた（Wieckowski et al., Autism Res., 2021）。それは 20 か月齢前後の幼児が ASD であるか否かを、専門家は 5 分間の面接でかなりの精度で当てていた。いろいろな case をみてきた専門家は、直ぐに ASD のようだと分かるらしい。左の図が結果である。青実線枠が正解、赤点線枠が不正解である。専門家が ASD と推定した場合、92.5%で当たっていた。一方、ASD でないと思った幼児の 24.4%が実際は ASD だった。ただ、この場合の確信度は低かった。したがって、ASD でないと思っても確信度が低い場合を考慮すると、かなりの正答率になると思われる。



より年少の幼児で縦断的に同じような研究が行われることを期待したい。どの月齢から、専門家は分かるようになるのだろうか。